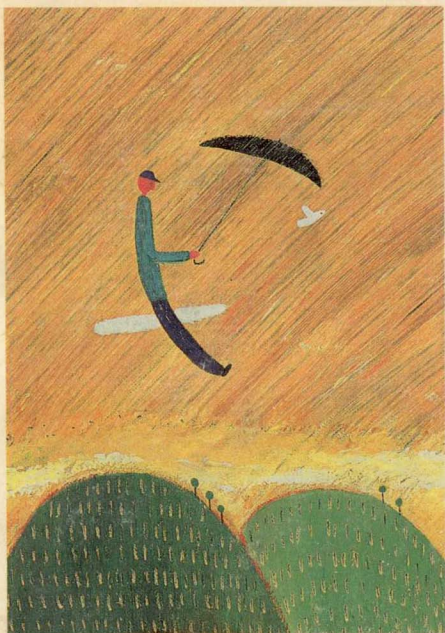


沖藤典子

新潮社版



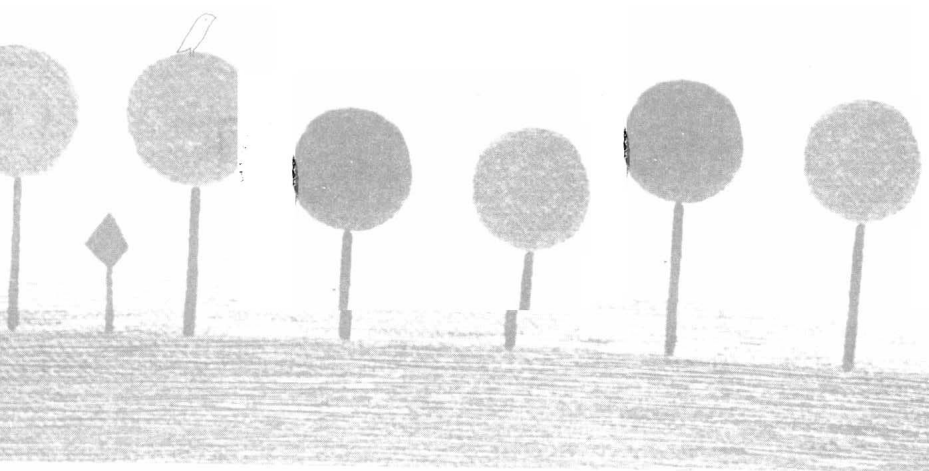
ホスピス病棟からの報告

平安なれ 命の終り

—ホスピス病棟からの報告

平安なれ 命の終り

沖藤典子



新潮社版

平安なれ 命の終り

——ホスピス病棟からの報告

昭和五九年三月一〇日発行

昭和五九年五月三〇日三刷

著者 沖藤典子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—266—5111

（編集部） 03—266—5411

振替東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 九八〇円



© 1984, Noriko Okifuji
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-331003-0 C0095

《目次》

1	内科十五病棟二号室の患者	5
2	聖隷ホスピスの誕生——ホスピスの歴史のなかで	34
3	一縷の希望	52
4	癌を知る	76
5	死の看とりとナーズ	104
6	どこで死ぬか——ホーム・ケア	130
7	死の準備と信仰	153
8	恋・サバイバルの時	175
9	残された人びと	198
10	ホスピスへの展望	215
	主要参考文献	239
	あとがき	243

平安なれ 命の終り——ホスピス病棟からの報告

1 内科十五病棟二号室の患者

「あらいらっしゃい。今日あたり見えるかなと思っていたのよ」

ドアを開けて、内側三十センチばかりのところにあるクリーム色のカーテンから顔を覗かせる
と、白髪混じりのショート・カットの頭がこちらにゆっくりと向き直った。

「ごぶさたしてしまつて、ごめんなさいね」

「いいえ、このつぎは七夕祭りの頃来るつて、この間おっしゃつていたでしょう。約束通りです
よ」

宮島舞。内科十五病棟二号室の患者は、小作りの浅黒い顔に、二重まぶたがくっきりした大きな目の、五十一歳になる直腸癌がんの患者であつた。枕元には読みかけの本が伏せてある。

彼女に会つと、いつも私は子供の頃田舎の山で拾ひ集めたドングリの思い出した。長いこと病床にありながら、よく動く表情や早口の喋り方にはどこか野性的で土の匂いがする。何よりも命を守ろうとするたくましさ、生への主張の強さには、堅く張りつめたドングリの表皮にも似た妥協を許さぬ闘いの意志を感じさせるものがあつた。

ホスピスとはどういうところか、その実践を教えて欲しいと、聖隷福祉事業団元会長（現・最高顧問）の長谷川保に頼んだ時、最初に紹介してくれたのが彼女だつた。その四月半ば以来亡く

なる十二月末まで、九カ月の短いつきあいではあったが、あたかも古くからの友人のような気のおけない親しきがあった。彼女は言ったものである。

「よく里親とか里子とか言うけれど、私達、里イトコみたいなものね」

聖隷三方原病院内科十五病棟（後のホスピス病棟）は、病院の一番奥、中央に赤いカーペットを敷いた細い渡り廊下を左に曲った一角にある。

病棟はナース・ステーションを起点に東に向って伸びており、廊下を間にはさんで病室が連なっている。二号室は廊下左側の個室でナース・ステーションに近い。

「面会時間は十五分ほどにお願いします」

と書かれた小さな札がピンクのリボンに結ばれている。ドアは時に開いていることもあった。

六畳ほどの病室は北向きで、大きな窓から晴れた日には静かな光が射し込んでくるが、この七月七日は、厚い雲が空を覆っていたせいか、室内はうす暗くむし暑かった。

部屋のほぼ中央に窓と平行してベッドが置いてある。窓ぞいの壁には小さな洗面台、歯ブラシ、タオルなど、窓下には衣類や日用品を入れた箱、洋書が並ぶ低い本棚、食器ケースなどが並んでいる。反対側のドア・サイドには四月から彼女の身の廻りの世話をしている付添いの柴谷ハルの簡易ベッドがあった。

その折たたみベッドと彼女のベッドとの間の丸椅子に腰をおろすと、正面が窓になり、隣の病棟外壁ぞいに大輪のあじさいが、深い青の花弁を微かに揺らせているのが見える。枝を切り落した槇が勢いのいい濃緑を見せ、夏の午後のけだるさの中で、命の盛りを謳いあげていた。

「お元気でしたか、気にしていたんですけどなかなか来られなくて」

彼女は赤い縁の眼鏡をはずして枕元に置くと、うす紫の花びらの散るガーゼの寝巻きの衿元を直しながら、

「それが、自分では元気なつもりなんですけどね……。ちっとも食欲がなくなつて。今朝も『いただきます』って三回位言つて、食べるぞ食べるぞつて励ますんだけど、掛声ばかりのにらめっこなのよ」

そのあとフフンというように笑つた。深刻な話をしている時でも彼女の語り口にはどこかユーモアがあつて、楽しい話でもしているような口調である。

六月に訪れた時は、五月に人工肛門をつける手術の予後が良くなく、熱も三十九度近いのが二週間も続いたあとだった。それでも面会を許された頃には熱も平熱に下がり、日によつても違つたが、朝はおみそ汁少々と重湯を小さいティー・カップ一杯ほど、氷らせたメロンを一舟食べられたと話していたのである。

「どうして食欲がなくなつちやつたんでしょうね……」

食欲とはいへ、健康人の食欲とはまったく意味するところが違う。せめて重湯でいいから喉を通つてくれないか、一口でも食べたいという気にならないものか、それが彼女の食欲の内容だった。彼女は溜息をつくと、

「どうしてなのでしょうね。それで今朝はようしとばかりがぶ飲みしてみたのよ、昨日はそれやつたら拒否反応起して全部戻つちやつてね。でも今朝はうまく納まつてくれたからご機嫌いいのよ」

女性にしては少し太めの声だが、長いこと教師をしていたせいかなその声にはつやがあつて、相手を話の中にひきずり込む力がある。

「先月あなたがいらした時は、ベッド・テーブルにしがみついても身体がフラフラして座つていられなかったでしょう。でもこのところはずっと座つていられるのよ、それだけでもありがたいわ」

「ひとつがうまくいくようになれば、ひとつがうまくいかなくなる、なかなか思うようじゃないものなのね」

「まったくね。嗅覚が異常に発達したらしくって、卵なんてとても臭いがいやなの。お肉もいや。どうしてこんなに變っちゃったんでしょね。薬の副作用かとも思うんだけど……。それとも胃袋が小さくなったのかしら。だけどそれはそれなりにおいしく食べられてもよさそうなものなの」

表面的には六月よりも元氣そうに見えた。体重も手術後一キロ増えて四十キロになった。歯切れのいい話しぶりは相変らずだし、頬もふっくらとした感じで、皮膚にはつやがある。

しかし、なんとなく顔が黒ずんできているように見える。ふとんの端に見える脚は膝がとび出ていて、ふくらはぎにはほとんど肉がなく、乾いた薪のようにゴツゴツしていた。夏だというのに、温めると気持がよいと、湯たんぽを二個入れてある。

「でも食欲の点を除けば全体に調子いいのよ。この間、ロビーまでソロソロ歩いていつてみたの。先生方喜んでくれて、カメラ持出してきて、パチパチ撮って下さったわ」

その時はよほど嬉しかったらしい。「先生の腕、アテにならないからダメダメ」などと冗談言ったりして楽しかったと語る。

だがその夕方、このほんのちよつとの冒険が原因なのか、熱が出て苦しむことになった。

「この頃は歩く元氣が出なくなっちゃって。前はこのワンコちゃん連れて病院の玄関あたりまで散歩出来たのに、今じゃもう無理ね」

ワンコちゃんというのは、一日約二千カロリーの栄養を与える中心静脈栄養法の輸液のビンをつるすスタンドである。それによって生命を保つことは可能であり、渴きも癒されるが満腹感を得られない。それにも拘らずそれは空腹感にはつながってこなく、食欲を起すことにならないの

だった。

食欲のなさは、若干何かが喉を通った、食べられたという状態を除けば、全体的にはもうずいぶん前、発病の頃から続いているものだった。

彼女の命が長いものではないということは、初めて会った四月の頃から言われていた。ホスピス所長原義雄は、その時、

「あと、一、二カ月くらいのものではないかと思えますよ」

だが、その後、五、六、七月と三カ月、確かに衰弱の観はあるものの、相変らず口調は威勢よく、独特のおもしろい言葉で笑わせてくる。

「だけど動きたくってしょうがないのに動けないのはつらいわよ。ヒスも起きてしまう。このゴム紐ひき千切ってどこかへ飛んでいきたいわ」

スタンドから右鎖骨下静脈に伸びている黄色の細い管を指でいじりながら、彼女は、

「まったくね、ヒモつきっていうのはよく言ったものよ」

と、肉体の束縛の実感をこめて言う。

しかし彼女は、そのヒモつき状態が生命を維持させていることを知っている。口ではいやだいやだと言いつつ、決してはずすとは言わなかった。

その頃、この内科十五病棟にいた二十六人の患者の入院動機はさまざまであった。

数度の手術を受けて「もうこれ以上は病院としてすることがない」と病院を追われた者もいるし、末期癌と診断された時点で入院を拒否され「お家で好きなようにして下さい」と言われた家族が、途方にくれて駆け込んできたケースもある。中には、今までかかっていた病院に絶望し、見切りをつけてここに来た者もいる。つまり、最初の異変に気づいた時点での処置を一度ならず受けた後、転移、再発などの二度めの変化にどう対応するか、その方策に思いあぐねた患者や家

族が、ここに寄り集まっていた。

患者の中には、癌と知らない者もいたし、ここがホスピスとは知らない者もいる。またその名を知っているにせよ、それに対して抱くイメージや期待も、患者・家族共に多様である。加えて病態もいろいろで、元氣そうに見えて食堂で食事をする患者もいる。全般に高齢者が多く、まだ五十一歳の宮島舞などは若い方だ。

どんないきさつから人々はホスピスを求めたのだろうか、そしてそこでどんな生を終えるのか、その手がかりの一つとして、まず、宮島舞の物語から始めよう。

宮島舞、仮名である。

彼女は生前さまざまなマスコミに登場していたが、私には仮名にしてもらった方がありがたいと語っていた。その遺志を、私は尊重したいと思う。

病名は直腸癌。転移はすでに腹腔内全体に拡がっている。

名古屋大学英文科を卒業したあと、独身のまま二十五年間、高校の英語教師を勤めてきた。

彼女が肉体の異変に気がついたのは、二年前、五十五年の七月四日であった。夜、掃除機をかけようとした瞬間、ぎくつと腰に痛みが走ったという。

それは突きあげてくるような激烈な痛みだった。身体をタテにしていればなんとか耐えられるけれど、横になるともう我慢出来ない。一晚を、立ったり座ったりしながら、本を読むことで気をまぎらせて過した。

「ずっと以前、学校で一緒だった先生が、腰が痛くて癌だったことがあるんです。だからあり得ることだとは思ったけど、まさか私がねえ」

それがその時の彼女の気持だったらしい。

その七月四日を彼女はこんなふうに回想する。

「その日、英語科の先生達の昼食会があつてでっかいビフテキたいらげたのよ。あれがお肉を食べた最後だったわね。あれ以来、縁が切れてしまったわ」

あとになつて彼女との会話を収めたテープを書きおこしてみると、「食べられない」という話と、「泣いてしまった」という話が非常に多い。食は生理的に、涙は心理的に、この二つは、なんとかして生きたいと最後まで希望を紡ぎ続けた彼女の、胸の奥から迸る生への限りなき思いだったのではないだろうか。

「あのビフテキがきつかけだったかもしれないわね。腸閉塞起しかけていたところにそんなものがきて、腸がびっくりしてねじれたかどうかして神経を刺激したんじゃないかしら。腸の真うしろがつつたような感じでしたよ」

彼女を診察した大病院の医師は、胃と胆のうの検査をして、貧血だと診断した。

「でも、変だなんて思い続けていたの。痛みが前の方に移ってきていたし」

この時彼女は、このことを訴え、お腹を指して「ここも痛いんですけど……」とは言つたものの、「そこは腸ですよ」としか言わない医師に、腸も調べて欲しいとは言いだしかねた。

「先生におまかせしている身だと思つて言い出せなかつたんです。それが今になつてみると口惜しくつて」

彼女は何度もこの話を私にしている。くり返すたびに、患者として医師に遠慮してしまった無念さが唇のあたりににじみ出た。

「その段階で腸を調べて発見してもらつていれば、二、三カ月は儲かったのよ」

「儲かる」という言葉を彼女は力をこめて言つた。しかしその儲かり方としては、必ずしも早期発見、それによる完全治癒には結びつけてはいない。せめてもの「二、三カ月」、このわずかな

期間であっても、彼女にとっては大切な「儲け」だったのである。

その後、腰の痛みは薄らいできた。幸いなことに、彼女はその年は担任を持っていなかった。もし、クラスを受け持っていたら、大学病院に行くどころか、足をひきずってでも学校に行っていたらと彼女は言う。

一学期の終り頃に学校に行つて、休んでいた間の仕事を整理し、

「夏休みの間に修理しておきます」

と冗談を言つて帰つてきた。

七月二十五日には、京都のホテルで開かれた「日本アメリカ文学会・京都セミナー」に一泊で出席している。世界各国の現代アメリカ文学者が一堂に会したもので、彼女自身ソール・ペローの研究者として、その専門家会議に出たのである。だがその時すでに、彼女の胃は食物を受けつけなくなり、パーティーのご馳走は眺めるだけのものではあった。

以来彼女にとって食物は「眺めるためのもの」であることが多く、看護婦らと「眺めるだけで胃に入っていく方法でないかしらね」などと言ひ合う冗談の種にすぎなくなつてしまつた。

体調は決して良くはなかったが、なんとか京都から無事帰つてきた。通院はしていたものの、状況は少しも好転しない。変だ変だと思ひながら夏休みを終え、ようやくのこと腸の検査をしたのが、その年の九月十日であつた。

その後、彼女の生活は急転回する。

十八日、結果が出るといふことで病院に行くと、即時入院を言ひ渡された。

二十二日の朝、ベッドの上で授業準備のノートを点検している彼女に、突然、今日手術するといふ知らせが届く。検査を続けるよりも手術した方がいいという医師の慌てように、彼女自身も驚いたし、不審の匂いも嗅ぎとつていた。

その時の入院は三週間であつたが彼女は、回診の医師達の英語のやりとりの中に、癌キヤンサーという言葉キヤンサーを聞いている。しかし医師は、彼女の質問にこう答えて言った。

「その可能性もあるので、今調べているところです」

十月三日、彼女は退院した。

独身を通してきた彼女は、八十三歳の母と一緒に暮してきた。この母も病気がちで、彼女の入院中は郷里山口の親戚宅に仮寓し、そこから山口市内の病院に入院していた。彼女は退院の足で山口に向う。

父は戦後間もなく病気で他界していた。母親が、中学校の教師をしながら、兄と舞の二人の子供を育ててきたのだった。

しかしその兄は、三十六歳の時に、カナダで客死した。国際法の学者であつた兄が、何故帰国直前にウイスキーで睡眠薬を飲むようなことをしたのか、自殺とは受けとり難い思いが、死をめぐる問題意識となつて、彼女はソール・ペローの研究を始めたという。

彼女が正確に病名を知つたのは、山口での病院でだった。その病院で外科から内科に移される時、脱いだ着衣の上に「これを持っていつて下さい」とカルテが置かれたのである。

「私、病名をくわしく知りたいとか、盗み見ようとか、そういう気持はまったくなかった。字の方から目に飛び込んできた感じだったわ」

だが彼女はカルテから目をそらせはしなかった。あたかも海綿が水を吸い取るように、しっかりと文字を脳裏に刻みつけていたのである。私は訊ねた。

「前にキャンサーという言葉聞いたと言つてましたけど、やっぱり本当のことを知りたいという気持もあつたのではないでしょうか」

「その気持がまったく無かつたと言つたら嘘になるわね。私、癌であることを知つたのは良かつ

たと思っているの。けどどうしてあんなにボンと患者の目に触れるようなカルテの置き方したのかしら。前の病院で聞かされていっても思ったのかしら」

「痛であることを知って、本当に良かったですか」

「それは、そう思ってますよ。けどあそこまで詳しく知る必要はなかったわね。卵巣、結腸、直腸の半分を取っているんですもの」

さらに彼女は、癌を知ってショックを受けたとか、愕然としたとか、世間一般に言われているような精神状況にはならなかったとムキになるようにして言った。ショックではなかった、だが腹が立った、どこに向けていいか分からない怒りのために泣いたと語る。

「やっぱりその晩は泣き明したわ。腹がたつてならなかったの。腸がおかしいと思いつつ、どうしてあの時言わなかったのか、お医者の方で気づいてくれなかったのか、自分にも医者にも腹がたつて、そうやって腹を立てている自分にも腹がたつし、泣いている自分にも腹がたつし、とにかく泣き通したのよ」

生の中断の予感への怒り、その理不尽なものへの怒り、運命への呪い、その闇にも似た怒りの中で彼女は泣いたのだとも言う。

本当のことを知った後の彼女の行動はすばやかった。お正月もそこそこに、昭和五十六年の一月には母を連れて名古屋に戻ってくる。この時彼女は、山口の親戚から、術後半年か一年の命だと知らされたが、そんなに早く？ と半信半疑の思いだったという。

その年一月から九月までは、名古屋の自宅にいて、月二回、大学病院に通う自宅療養であった。精神的にはこの頃が一番不安と焦燥に満ちていて苦しかった。彼女は力をこめて言った。

「月二回病院に行くんだけど、私の耐用年数のことについては……、絶対に忘れられなかったのよ」